

# 人類学のフロント・ラインを歩く

## 在日米軍を中心とする軍事共同体の人類学的研究



たなかまさかず  
教授 ◆ 田中雅一

1955年生、1986年、ロンドン大学経済政治学院 (LSE) 博士課程学位取得 (Ph.D.)

手元に2つの新聞記事がある。ひとつはロンドンのタミル移民を讀者とする『ニュー・ライフ』(1984年9月21日) 掲載記事「日本とヒンドゥー教——結びつき」で、簡単な記事とともに調査時の写真が紹介されている(右ページ)。私はロンドン大学の学生で、1982年6月から翌年の11月までのおよそ17ヶ月間、スリランカ西海岸に住むタミル漁民たちの生活を理解するために住み込み調査をしていた。もうひとつは1998年5月、佐世保にある米軍基地に調査に行き、逆取材を受けたときの記事だ(下)。これは国防省の日刊新聞『星条旗新聞』(太平洋版、5月27日)に掲載された。ネクタイをつけた顔写真で、フォーマルな印象が強い。一方はロンドンのタミル人向け、他方は世界中に駐留している米軍人向け新聞と、われわれの時代を特徴づける地球化の現象を示唆している。しかし、ここで取りあげたいのは、この二つの調査の間

に起こった人類学をとりまく変化だ。

### ■タミル人とともに

人類学は研究の典型と言える学問である。実験室や図書室にこもらないで、外に出て資料を収集する。一般に人類学の調査はおよそ1年半から2年の長期に渡っておこなわれるが、そのときわれわれに期待されるのはGoing Native(現地人のようにふるまう)というものだ。

わたしがタミル人漁村をフィールドに選んだ理由はヒンドゥー社会では農村に比べて漁村の調査が手つかずに近い状態であったからだ。農村や巡礼地での調査で論じられてきたヒンドゥー教やカースト制度に関する議論を漁村で検討してみよう。そこに認められるのはきわめてストレートな問題意識だった。

スリランカに住み始めてちょうど1年がたったころ、あの「7月の暴動」が勃発し、およそ5000人のタミル人が虐殺され、かれらがおかれている地位の危うさを痛感することになる。タミル語を母語とするヒンドゥー漁民を対象としていたので、仏教徒が支配的なスリランカの、まさに周辺的世界に目覚めたのである。その後、タミル人独立をめぐる民族紛争とテロ事件が激化し、多くのタミル難民が隣国のインド、さらに第三国を介して北米や欧州へと流れ、ホスト社会の最下層に組み込まれていった。

1988年の暮れ、わたしはフィールドを南インドに移し、高い地位のバラモン・カーストを相手に調査を始める。しかし、かれらも政治経済的にはけっして恵まれた存在ではなかった。なぜなら、南インドでは反バラモン意識が強く、バラモンたちはさまざまな差別を受けてきたからだ。かれらは50年以上前から地方政府と寺院の管理権をめぐる対立を続けていた。

わたしはおよそ20年間にわたってタミル人と付き合い、多くのことを学んだ。しかし、わたしは、いくつもの困難を感じ始めていた。そのひとつがいわゆるオリエンタリズム批判である。



国防省による『星条旗新聞』(太平洋版)の第一面を飾った記事。その後三つの新聞に掲載され、世界中の米軍関係者から調査協力を申し出るメールが来た。

## ■サバルタン探しが始まった

オリエンタリズム批判とは何か。それは、パレスチナ出身のエドワード・サイードの名著『オリエンタリズム』から始まった。単純に言えばつぎのようになる。東洋学を典型とする異文化を対象とする学問は、西洋の優位さを確立し、またそれを確認するような形で異文化についての知識を獲得し、それを描いてきた。そこに植民地支配を助長・正当化する政治性——たとえば東洋の文明は過去のものであり、その発展は西洋の助けによってのみ可能だ——を認めることは困難ではない。否定的な他者像は、よりダイナミックで日々進歩しているという西洋の自己像を補完し、これを支える。とするなら、当然同じ批判が人類学にも妥当する。オリエンタリズムに陥ることなく他者について語る資格があるのか。この問いに自信を持って「イエス」と答えられる人類学者は少数であろう。ただ、以下の二つの反論が考えられる。

人類学のフィールドワークはけっして一方的なものではない。西欧で生まれた学問用語で装備していたとしても、われわれの考え方の偏りがフィールドで出会う他者との交渉を通じて変化していく可能性が存在するからだ。

もうひとつは、声なき人々の存在である。人類学がかつて「未開社会」とみなされた第三世界以外で調査する場合でも、そのフィールドは、農民や都市の低所得者層、あるいは少数民族などの周縁に位置する人々である。同じ理由から女性や身障者、同性愛者なども研究対象に含まれる。私の調査したタミル漁民や司祭はその典型である。グラムシに由来する最近の流行言葉を使用するなら、人類学が追いかけてきたのはサバルタンだった。この流れは、当該社会で抑圧されている人々の声を代わって、代弁しようとするのが人類学であるという主張へとつながる。彼らがわれわれ人類学者の介入を求めているのだから、オリエンタリズム批判は見当違いだ、というわけだ。

しかし、ほんとうにこの二点は反論になっているのか。フィールドワークでの交渉的関係の経験はその通りだとしても、最終的な成果はこうした貴重な経験を

隠蔽したり、否定していないだろうか。また、サバルタン自身が、代表・表象する人類学者を求めていると想定することこそ一方的な権力関係に基づく思いこみでしかないのではないか。そして当該社会の複雑な権力関係を無視することにならないだろうか。

## ■軍事人類学の構想

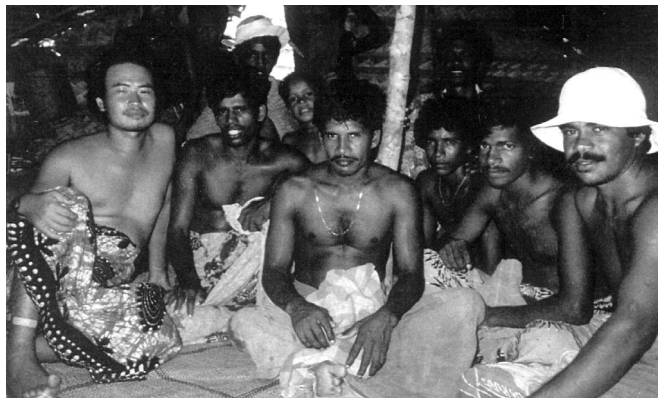
以上の問題意識から、在日米軍基地をとらえ直すと、軍関係者をサバルタンと呼ぶことははばかられる。世界最強の軍隊は、おおいに自らを語る術を持ち合わせている。もちろん、だからといって基地研究がオリエンタリズム批判の克服になるとはかぎらない。だが、すくなくとも自覚ある人類学者がこぞってサバルタン探し

のゲームに参加し、実現不可能な解決を書き散らすといった閉塞状態から人類学を救い出すことができるのではないか。

最後に基地調査について私の問題意識を紹介したい。まず言えることは、わたしたちは在日米軍だけでなく軍隊についてほとんど何も知らない、ということだ。私たちの米

軍についての知識は、軍事、政治（協定）、そして基地周辺の風俗やスキャンダルについてのマスコミ報道にかざられている。わたしは基地に足を運び、取材を重ねることで、基地に住む女性兵士と軍人の妻との比較、軍隊特有の定期的な移動、基地内にある大学のカリキュラム、イスラームのイマームを含むさまざまな聖職者（従軍牧師）たちの活動、日本各地への観光、基地内の新聞などに注目してきた。これらはいわばマスコミが無視してきた基地の日常生活を垣間見せるものである。そして、その各々がジェンダー理論や政教分離問題へと展開することになった。

人類学の方法も対象も、そしてさまざまな支配的パラダイムも刻々と変わっていく。そのなかで、いかにしてオリエンタリズム批判に真摯に取り組み、現実から乖離することなく、理論的な問題に取り組むことが可能か。開発人類学や観光人類学といった分野は、このような意識のもとで近年生まれてきた。いままさに始まろうとしている軍事人類学anthropology of militaryという分野もいつの日か市民権を得ることを切に望みたい。



『ニュー・ライフ』の記事に転載されたスナップ写真。私はパティックの腰巻きをつけ、上半身は裸。